

令和元年5月17日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02030

研究課題名(和文)「女性の貧困」を捉える：世帯内資源配分に着目した実証研究の方法の開発

研究課題名(英文) Visualize women's poverty: how to capture 'hidden poverty in the household'

研究代表者

鳥山 まどか (Toriyama, Madoka)

北海道大学・教育学研究院・准教授

研究者番号：40459962

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、特に女性が経験することの多い「世帯のなかに隠れた貧困」を実証的に捉え、議論するための調査・研究の方法について検討する前段階の作業として、日本と英語圏の先行研究においてこの問題がどのように論じられてきたかを検討した。

世帯内資源配分研究は夫妻間の不平等にもっぱら関心を向けるが、世帯のなかに隠れた貧困を直接捉え得るものは限定的、英語圏ではDV研究における経済的虐待への関心が高まっているが、日本では周辺的な扱い、マネープロblemに関する研究は一定なされているものの、家計管理負担への着目が不十分、子どものケアにかかるコストやそれをめぐる支出配分への関心は高くない。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世帯のなかに隠れた貧困を研究の対象に位置づけることには、次の2つの意義があることが確認された。世帯単位の貧困把握では見えなくなる形の貧困の可視化。それにより、貧困になることを恐れて家から出られないような女性たちの問題に光があてられる。これは、他の先進国と比べて女性世帯主が少ない日本ではとりわけ重要である。女性が自身の生活水準を落とすことで、子どもや他の世帯員が貧困な生活水準に陥ることを防ぐような時に女性が払っている犠牲の可視化。これは、貧困を回避するために家族で助け合うことを過度に称揚する政策や風潮を批判的に検討する上でも重要である。

研究成果の概要(英文)：It sometimes occurs that women are poor when their other household members (their children and their male partner) are not, or that women experience poverty more intensely than other members. We call 'hidden poverty in the household' for this kind of poverty. We investigated that what kind of researches have been done about it.

1) Intra-household distribution: researches in this area are focused on inequalities between wife and husband. There isn't sufficient survey data that can be analyzed about 'hidden poverty in the household'. 2) Domestic violence: financial abuse is associated with this kind of women's poverty. But In Japan, interest in financial abuse is only peripheral. 3) Money problem: although some important researches have been done, none pays much attention to the household money management burden. 4) Child rearing: there is low interest in the cost of child care and the associated allocation.

研究分野：教育福祉論、社会福祉論

キーワード：女性の貧困 世帯のなかに隠れた貧困 世帯内資源配分 ドメスティック・バイオレンス マネープロblem 子育て

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

貧困研究および貧困にかかわる政策・実践においては、世帯単位で貧困を捉える・扱うことが前提とされることが多い。これは例えば貧困測定に顕著である。最近の日本でもよく使用される「等価可処分所得の中央値の2分の1」という貧困線で測定する場合、この貧困線を上回る世帯で生活する世帯員はすべて貧困ではないとして扱われ、貧困線を下回る所得の世帯で生活する世帯員はすべて同程度に貧困な生活をしているものとして扱われることとなる。ここには、「世帯のなかでは、貨幣をはじめとする資源が平等に分配される」という前提がある。しかし実際には次のようなことがあり得る。

- ・世帯所得でみると貧困線を上回るが、そこで生活している一部の世帯員のみが生活水準が貧困状態にある。

- ・貧困線を下回る所得で生活する世帯の中でも、一部の世帯員の生活水準が極端に低い状況にある。(それによって、他の世帯員が貧困線を上回る生活水準に押し上げられることもある。)

こうした形での貧困を経験しやすいのは女性、特にケア役割を担う女性であると考えられる。こうした形の女性の貧困は、従来の貧困研究における議論では見逃されやすく、特に、実証的な把握はほとんどなされてこなかった。

2. 研究の目的

世帯内の個人単位で実証的に貧困を把握し、議論することは貧困研究の重要な課題の1つである。本研究はこの課題に迫ろうとするものである。ところで、世帯内の個人が経験する貧困(以下、「世帯のなかに隠れた貧困」とする)については、世帯内資源配分研究やドメスティック・バイオレンス(以下、DV)に関する研究・実践などの領域で部分的に捉えられてきた。本研究は、こうした関連領域に散在する研究に学びながら、世帯のなかに隠れた貧困を実証的に把握し、議論するための調査・研究方法について検討することを目的とした。

3. 研究の方法

世帯のなかに隠れた貧困を実証的に捉えるための調査・研究方法について検討する前段階として、日本および英語圏における、世帯内資源配分研究など他の領域で同様の問題がどのように捉えられ、議論されてきたかを整理し検討する作業が必要となる。本研究はこの作業に中心的に取り組むこととした。

検討した研究は大きく次の4つの領域に分けられる。(1)世帯内資源配分に関する研究、(2)DVに関する研究、(3)マネープロblem(借金・滞納)に関する研究、(4)子育てに関する研究。この作業を通じて、世帯のなかに隠れた貧困を研究対象にし、議論の俎上に載せることの意義を示す。

4. 研究成果

先に述べたように、世帯のなかに隠れた貧困に関連する事柄は複数の領域にわたり散発的に議論されてきた。本研究ではこれらを「3. 研究の方法」に示した4つの領域に整理した上で、それぞれにおいて世帯のなかに隠れた貧困がどのように論じられてきたか/論じられてこなかったかを検討した。

(1) 世帯内資源配分に関する研究

英語圏では1980年代以降、世帯内の資源配分に焦点をあてた研究がさかんになった。日本ではそれらに影響を受ける形で、家計経済研究所を中心に、イギリスの研究の紹介と独自の調査が行われていく。

英語圏では、世帯内資源配分の「結果」(outcome)に焦点をあてた研究と、「過程」(process)に焦点をあてた研究の2つに分類されるのが一般的である。「結果」は世帯内での個人の消費やwell beingの状態、「過程」はこれがどのように資源の管理や支配と結びついているのかをみている。「結果」に焦点をあてた研究としては、世帯内の個人の消費や生活水準をとらえようとしたもの、「過程」に焦点をあてた研究としては、家計管理類型を把握しようとするものがある。

世帯内資源配分研究では、主に世帯のなかの夫と妻の不平等に焦点があてられてきたが、そのような不平等を原因とする世帯のなかに隠れた貧困を直接捉える研究はかなり限定的である。特に日本では、世帯のなかの個人に焦点をあてた調査データが、イギリスなどと比べて圧倒的に少ないことが、この分野の研究の発展を妨げている。

(2) DV研究

世帯やカップルのなかで、特定の個人が貧困に陥るという背景には、少なからずDVの実態がある。DVは、たいていは複合的な暴力の形をとるが、その一つに「経済的虐待」があり、それは、世帯内の構成員などによる金銭的な搾取や諸コントロールを通じて行われる。

そうしたDV研究における「経済的」な関心は、海外と日本では異なる。日本においては、DVはこれまで、身体的暴力に関心が向き、経済的な側面についてはせいぜい補足的に説明される程度で、その実態に関する研究もほとんどなされていない。海外では、経済的虐待に焦点を当てたものが2000年代から多く蓄積されており、とくにイギリスに注目すれば、経済的虐待を専

門とした民間団体もあり調査の実績もある。日本のDV防止法は、「経済的暴力」を支援の対象としていないが、イギリスの法律では支援の対象に組み込んでいる。

(3) マネープロblemに関する研究

借金や滞納といった問題としてあらわれる、家計管理の問題や困難（マネープロblem）に関して、イギリスでは貧困・低所得世帯における家計管理の実態をとらえるための量的および質的調査が行われてきた。一方、日本では、家計経済研究所を中心に、イギリスの研究の影響を受けながら、家計をめぐる変化（家計の長期化、外部化、個別化）の中で家計の全容が見えにくくなっていることと関連して発生する問題として、マネープロblemの議論がなされた。特に、同時期に社会問題化してきた多重債務問題に関する実証研究として蓄積されている。

イギリスと日本のいずれの研究においても、世帯内資源（貨幣）配分を意識した分析が行われているが、主に配分の「過程」に重点がおかれ、配分の「結果」についての議論は十分ではない。また、借金や滞納に対応するための家計管理の負担（メンタルヘルスへの影響等）についての実証的把握も今後の課題である。

(4) 子育て研究

子育てにかかる費用が大きいこと（したがって世帯内での資源配分の優先度が高く、そこへの配分量も大きいこと）そして、子育てをはじめとするケアは誰かによって引き受けられなければならない、かつ、その内容はケアを担う人が自律的に決定できない側面があること、ケアを担うことで稼得の機会が制限されることといった理由から、子育て世帯においては、ケア役割を担う世帯員（多くの場合は女性）が世帯のなかに隠れた貧困を経験する可能性が高くなる。

教育を含む子育て費用は、家計の中でも少なくない割合を占めること、教育費が高まるライフステージにおいては、妻だけではなく夫の資源配分も抑制されることがあることが確認されている。しかし、先述の資源配分研究は、子育て世帯を対象とした調査にもとづくものも少なくないにもかかわらず、子育て費用やそれをめぐる支出配分への関心は高くなく、この部分に着目した調査も限定的である。

世帯のなかに隠れた貧困を新たに研究の対象としなおすことには、次の2点の意義があることが確認された。

- ・世帯を単位に貧困を把握することで見えなくなってしまう形の貧困が可視化される。それにより、貧困になることを恐れて家から出られないような女性たちの問題に光をあてることが可能になる。他の先進国と比べて女性世帯主が少ない日本ではとりわけ、女性の貧困を捉える際、母子世帯や単身女性の貧困だけではなく、こうした世帯のなかに隠れた貧困もともに捉えることは重要である。

- ・女性が自身の生活水準を落とすことで、世帯全体や子どもの生活が貧困に陥らずに維持されていることは少なくないが、この場合に女性が払っている犠牲を可視化することができる。それは、ときにみられるような、貧困を回避するために家族のなかで助け合うことを過度に称揚する政策や風潮を批判的に検討する上でも重要である。

また、こうした世帯のなかに隠れた貧困を捉えるためには、調査・研究の「方法」の検討に加え、貧困概念を検討する必要性も示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計11件)

深谷弘和・岡部茜・松岡江里奈・山本耕平・丸山里美、「韓日における子ども・若者の生活困難状態への路上アウトリーチ ソウル「動く青少年センター EXIT」の支援実践から」、『立命館産業社会論集』、査読有、54(2)、2018年、123-136

吉中季子、「非正規労働と年金 女性を中心に」、『貧困研究』、査読無、21、2018年、47-60

吉中季子、「大学生の国民年金保険料の支払いの意味 制度変遷からの検討と加入の実態」、『年金学会誌』、査読無、37、2018年、19-25

吉中季子、「母子世帯の貧困 高齢期への視点」、『労働調査』、査読無、2018年4月号、2018年、4-8

丸山里美・古久保さくら、「婦人保護施設「生野学園」の歩み」、『思い、紡いで(いくの学園20周年記念誌)』、査読無、1、2018年、53-88

丸山里美、「見えない女性の貧困とその構造 ホームレス女性の調査から」、『住民と自治』、査読無、8月号、2017年、10-13

田中智子、「障害者の母親における長期化するケアラー役割」、『障害者問題研究』、査読無、45(3)、2017年、10-17

田中智子・丸山啓史・森田洋、「保育施設の利用にかかる費用負担(下) - 京都市の実態と保護者の取り組み」、『月刊保育情報』、査読無、492、2017年、13-17

田中智子・丸山啓史・森田洋、「保育施設の利用にかかる費用負担(上) - 京都市の実態と保護者の取り組み」、『月刊保育情報』、査読無、491、2017年、7-11

〔学会発表〕(計2件)

吉中季子、居住喪失した女性の貧困 一時生活支援事業の事例検討から、貧困研究会第11回研究大会、2018年

Yayo Okano and Satomi Maruyama, The lack of care/the lack of participation: From experience of poor women in Japan, Caring Democracy: Current Topics in the Political Theory of Care、2017年

〔図書〕(計6件)

松本伊智朗・湯澤直美編著、明石書店、『シリーズ 子どもの貧困 生まれ、育つ基盤 子どもの貧困と家族・社会』、2019年、342 (序章・松本伊智朗、5章・丸山里美、6章・鳥山まどか)

佐々木宏・鳥山まどか編著、明石書店、『シリーズ 子どもの貧困 教える・学ぶ 教育に何ができるか』、2019年、319

Satomi Maruyama, Trans Pacific Press, Living on the Streets in Japan: Homeless Women Break their Silence、2019年、255

田中智子・丸山啓史・森田洋編著、かもがわ出版、『隠れ保育料を考える 子育ての社会化と保育の無償化のために』、2018年、87

丸山里美編著(自立生活サポートセンター・もやい編集協力)、『貧困問題の新地平 もやいの相談活動の軌跡』、旬報社、2018年、185

松本伊智朗編、法律文化社、『「子どもの貧困」を問いなおす 家族・ジェンダーの視点から』、2017年、272 (序章・松本伊智朗、6章・丸山里美、7章・鳥山まどか、8章・吉中季子、12章・田中智子)

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：丸山 里美

ローマ字氏名：(MARUYAMA, satomi)

所属研究機関名：立命館大学

部局名：産業社会学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：20584098

研究分担者氏名：田中 智子

ローマ字氏名：(TANAKA, tomoko)

所属研究機関名：佛教大学

部局名：社会福祉学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：60413415

研究分担者氏名：吉中 季子

ローマ字氏名：(YOSHINAKA, toshiko)

所属研究機関名：神奈川県立保健福祉大学

部局名：保健福祉学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：70434800

研究分担者氏名：松本 伊智朗

ローマ字氏名：(MATSUMOTO, ichiro)

所属研究機関名：北海道大学

部局名：教育学研究院

職名：教授

研究者番号(8桁)：20199863

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。